

空間コードから共創する中川運河 第1回オープンディスカッション

【開催概要】

開催日時： 2016年9月28日（水）13：30～16：00
場所： 愛知大学講義棟5階L516教室
話題提供者： キャナルリゾート店長 川口真仁氏
東邦ガス株式会社用地開発推進部港明開発グループ専任部長 駒田敏行氏
※富士コーヒー株式会社取締役・外食事業部部長 塩澤彰規氏
（※都合により当日不参加）
コーディネータ： 内山志保
参加者： 10名（話題提供者を含む）
主催： 都市コミュニケーション研究所
代表： 竹中克行（愛知県立大学教授）

【内容進行】

13：30～14：00 基調レクチャー：竹中克行
「空間コードから共創する中川運河—「名古屋の大静脈」の未来」
（資料 [OD#01 基調講演.pdf] ）
13：30～14：05 休憩
14：05～14：30 話題提供者より中川運河における各事業の紹介
14：30～14：50 テーマ1：事業活動の場としての中川運河
14：50～15：00 休憩
15：00～15：30 テーマ2：新しい水縁について
15：30～15：50 会場参加者からの質疑応答
15：50～16：00 まとめ

※上記スケジュールは予定として組んだもので、当日は必ずしも予定どおりとはならなかった。

【ディスカッション記録】

（注）ディスカッション記録では、文体を「である」調で統一している。話題提供者および主催者（竹中、内山）以外の発言は匿名化した。

事業活動の場としての中川運河

川口 清須市で温泉施設を営んでいるオーナーが新店舗の開設にふさわしい場所を探しているさいに、中川運河のこの場所に注目した。理由としては、周辺に住宅が多く利用者が見込める

こと、業界関係者の間で、周辺一帯は温泉が湧く場所として知られていたことなどがあげられる。近い将来に港アクルス（東邦ガス港明地区の再開発）がオープンする予定であるなど、これから発展してゆく地域だという期待もあった。実際、掘削してみたところ、48.8度のナトリウム泉という予想より高質の温泉が湧いたため、開業するに至った。

開店してみたものの（2014年12月）、当初はまだ工事中の場所が残っており、必ずしも順調なスタートではなかった。外観から「ラブホテル」のようだと言われたこともある。しかし、自分たちとしては、「リゾート」の雰囲気を出したいと思っている。最初の1年は試行錯誤だったが、今年になって、事業が軌道に乗ってきた感じがする。客層については、平日と休日の差があまりなく、平日の年齢層が年配客に偏るといったこともない。リゾートというコンセプトが、若い人を引き寄せているのかもしれない。（参考資料 [OD20160928 キャンナルリゾート.pdf]）

駒田 広大な土地を持っている事業者として、土地を分割しないで一体開発することで、「ひとつの街」をつくらうと試みている。地域の活性化へインパクトを与えたいと考えた。

敷地は貨物線によって東西に分断されているが、まずは地下鉄からのアクセスの良い東側に集客施設を立地して先行開発する計画である。第2期工事にあたる貨物線より西側（運河側）のエリアは時間をかけて検討する考えであるが、教育・研究開発施設など、ものづくり、ひとつづくりに資する施設を立地させたいと考えている。

エリア内では、ガス・コージェネレーションを主とした新しいエネルギーシステムの導入を考えている。そのなかで、運河の水を利用したヒートポンプの採用も計画している。運河の水を熱源として利用するには、水量が多い本線で行った方が効率は良い。しかし、現状では本線沿いに用地を持っていないことに加え、港湾施設に指定されている本線では手続きが複雑になるため、横堀で行うことにした。（参考資料 [OD20160928 みなとアクルス.pdf]）

A氏 キャンナルリゾートさんは、現状ではとくにあの場所でなくてはならないという施設ではないようにも思うが、中川運河沿いという立地を積極的にいかす考えはどの程度あるのだろうか。

川口 私たちは、当初中川運河を意識していたわけではなかった。実際、予定していた施設名は「じゃぼん」だった。そこへ広告代理店から「キャンナルリゾート」という名前のアイディアが出て、中川運河のリゾート施設というコンセプトを打ち出すことにした。1年目は事業を継続させるのに精いっぱいだったので、地域との繋がりへと意識を向ける余裕がなかったが、徐々に考えていきたいと思っている。今後、運河を活かしたスペースの拡張工事も予定している。

内山 エントランスに中川運河の古い写真を展示するギャラリースペースが設けられている。そうしたところに地域との繋がりをもとうとするキャンナルリゾートさんの意識が表れているのではないかと。

竹中 運河沿いの事業者従業員を積極的に客として取り込もうという考えはあるのか。

川口 先日開催されたドラゴンボート会場で、パンフレットを配布し、広報させていただいた。今のところそれ以上の特別な付き合いはないが、今後は機会があれば取り組みたい。

B氏 事業者のなかには、広々とした運河がつくる開放的空間ゆえに、町中でありながら工業的な

土地利用が可能になっていることを中川運河の特徴と考えるものもある。その一方で、粉塵などを発生する工場施設と人々が憩う場所との共存はどうしても難しいのではないかという意見もある。

川口 私たちは、工場の稼働音やトラックの音のリゾートの雰囲気とマッチしないという懸念をもっていた。対策として、駐車場に滝を設置して、水が流れる音で環境音を掻き消そうとしている。

C氏 中川運河では、工場の方が先にあったという考え方もある。

運河周辺の土地利用のあり方

A氏 東邦ガスさんの貨物線より西側の第2期開発エリアは、時代の最先端の試みをする場所として活用できないだろうか。

駒田 東西の敷地を一体開発する方針が決まる前は、倉庫業の需要がある西側を切り売りするという案もあった。しかし、町に大きなインパクトを与える可能性のある事業だけに、企業としての社会的責任をふまえて判断を下した。現在、西側のエリアについては、複合業務施設エリアとして位置づけているが、誘致する業務施設としては、東側の商業施設と親和するものが理想である。閉じられた研究所のようなものではなく、公開実験や工場見学を行うといった、市民に開かれた場所にしたい。私の個人的な思いだが、第2期工事は東邦ガス株式会社の100周年にあたる平成34（2022）年の完成を目指したい。

D氏 公有地の倉庫敷地と民有地である建築敷地を、運河沿いの道路を挟んで一体的に使用するために、東邦ガスさんの所有地の一部を倉庫敷地と換地できないだろうか。〔注：中川運河では、運河の両側に並行する都市計画道路を挟んで、運河側（倉庫敷地）が名古屋市の市有地として事業者へ賃貸されているのに対して、陸側（建築敷地）は、運河開削時の区画整理を経て民間事業者へ分譲された。〕

駒田 社内でも、運河沿いの道路を挟んで街並み形成を意識して集客施設を立地させる案が一時期検討された。その後、地下鉄からのアクセスが良い貨物線より東側のエリアに集客施設を集中させる計画で進めることになった。

B氏 ゾーニングによってエリアを絞るのではなく、中川運河を一体的に考えることが重要だと思う。〔注：「中川運河再生計画」（2012年）では、「にぎわいゾーン」「ものづくり産業ゾーン」「レクリエーションゾーン」というゾーニングが行われた〕。チャンネルアートが以前開催したシンポジウムでも、ゾーニングの考え方は古いという学識者の発言があった。もっとも堀止付近は、ささしま地区の再開発によって人の流れが大きく変わるので、特別な場所だと意識しているが。

モビリティマネジメントの課題

B氏 キャンダルリゾートはシャトルバスを走らせているが、利用状況はどうか。

川口 金山駅など、主要駅からシャトルバスを運行している（資料参照）。しかし、現状9割が自家用車での来客であり、シャトルバスの利用者は1日100～150人程度である。バスの車内放送で地域情報を流すなどの工夫を行い、お客さんの反応をみながら、少しずつ地域との繋がりを作りたいと考えている。

駒田 私たちの場合、オープン予定の商業施設へのアクセスについては、7割が自家用車、3割が地下鉄・バス等の公共交通機関の利用を見込んでいる。水上バスの集客効果には期待しているが、現段階では未知数なので、シミュレーション上には組み込んでいない。周辺への渋滞等

の影響を考えると、公共交通機関の利用促進策などにより車の利用を6割程度まで抑える必要がある。また、東西方向の人の流れが少ないので、金城ふ頭方面との連携もはかりたい。

私たちは、中川運河再生計画が自分たちの取組みの上位に位置すると考えている。このため、運河本線に面した土地はもっていないものの、横堀（港北運河）を親水空間として積極的にいかす考えである。その一環として、名古屋市と協力して水上バスの船着場を横堀に設け、運河側からエリアにアプローチできるようにしたい。

内山 水運が活発だった頃は、事業者どうしの繋がりが重要だった。現在でも事業者相互の連携の可能性はあるだろうか。

川口 この場所に来たばかりなので、他の事業者の方々との繋がりが希薄だが、将来的には連携できるといいと思っている。

内山 さきほどシャトルバスの利用が少ないという話があったが、例えば複数の事業者で共同してバスを運行することは考えられないか。

川口 将来的にできたら良いと思うが、今は事業者どうしの付き合いが少ないので難しい。最初の1年目は経営を成り立たせるだけで手一杯だった。

その他全般

D氏 水運がなくなった今は、「水縁」とは志の繋がりだと思う。上流と下流でアート活動が芽吹いているので、中流の東邦ガス再開発エリアでも、エネルギーと関連させたアート活動ができないだろうか。また、前半のレクチャーの中にあつた、「名古屋の大静脈」という呼び名が気になった。静脈というと下水を連想し、ネガティブなイメージを持つ人が多いのではないか。

駒田 空間コードの本を読んで、中川運河をどうすればよいかはわかったわけではないが、中川運河が「百年の計」を立て、自然の一部として融合していったという見方は印象に残った。東邦ガスの事業は、大規模であるがゆえに、これからの中川運河の大きな方向性を左右するトリガーとしての意味をもつかもしい。間違った方向へ導かないよう努めなければならないという責任を感じている。

【次回に向けたコメント】

コーディネータ（内山）

中川運河の「らしさ」をありのまま受け止めることが、空間コード研究の基本姿勢です。しかし、たんに現状を追認するのではなく、今は存在しないけれども「こうなってほしい」と未来に向けて願っている人々の姿も同様に大切と思います。空間コード研究は、未来の「らしさ」への懸け橋になるべきものでしょう。

他方、現に中川運河と関わり、計画を進めている人々の間では、中川運河に対するある種の「イメージ」や「思考の型」のようなものがすでに存在すると思います。多くの人が協働するうえでは、なんらかの「イメージ」や「型」の共有が必要ですが、それがたんに「無難な」イメージであるがゆえに共有しやすいにすぎないとすれば、場所の個性を削ぎ落してしまいかねません。「こうなってほしい」という未来像が、中川運河らしさをより豊かにするものなのか、反対にどこにでもある水辺へ

と一般化してしまうものなのか、慎重に議論を深める必要があると感じています。

なお、今回のディスカッションを通じて、今後の検討材料となりそうな事柄がいくつか浮上しましたので、下に列記しておきます。

* 道路を挟んだ土地の一体利用の可能性—キャナルリゾートさんが現在行っているように、倉庫敷地を駐車場として利用するのも、選択肢の一つとして考慮するとよいかも。

* 運河沿いのモビリティマネジメント—市バスは既存のリソースとして重要。それをいかすには、運河に沿った繋がり活性化とセットで考える必要があるのではないか。

* 企業活動の場としての中川運河の未来—そもそも、これからの中川運河にふさわしい事業活動とはどのようなものなのか。

主催者代表（竹中）

中川運河が開削された当時、名古屋市は「中川運河案内」という入念に練られたパンフレットを用意して、分譲地とされた倉庫敷地への企業誘致に熱心に取り組みました。「分譲地御視察の場合は市の自動車御案内致しますし、御用の節は電話かハガキを下されば係員が参上して詳細にご説明申し上げます」と記した「案内」がアピールしていたのは、企業からみた港湾インフラとしての使い勝手の良さや名古屋汎太平洋平和博覧会（1937年）の開催に象徴される産業地域としての将来性でした。やがて運河沿いに建ち並ぶことになる倉庫や工場の建築デザインへの言及はまったくなく、もっぱら「苗床」たるインフラのデザインのカで中川運河の利用価値を訴えたのです。そうした運河に可能性を感じ、仲間であり競争相手であったかもしれない事業者が鎬を削り合うことによって、いつの間にか、ノコギリ屋根の倉庫や水面上に張り出したクレーンのシルエットに象徴される中川運河の風景が生まれました。

今日、中川運河が「再生」を必要としているとすれば、それは、中川運河にふさわしい利用価値を引き出せていない現状があるからだと思います。もちろん倉庫敷地は、賃貸地として多くの事業者によって活用されていますから、その限りでは中川運河が衰退しているとは言えません。しかし、中川運河という港湾インフラや名古屋における立地条件に積極的な意味を見出すことのできない事業活動が大多数を占めるのであれば、中川運河はどこにでもある産業用地の一つにすぎないことになり、幸い、中川運河には、今もこだわりや利用価値を感じて事業を続けている企業が少なからず存在します。「名古屋の大静脈」というコードが可視化しようと試みたのは、そうした事業者を核として、中川運河に生活・生業の場としての良さを見出してきた人々の「水の縁」です。今われわれが必要としているのは、人々に種を蒔きつづけてもらうための苗床として中川運河をとらえ、現代と未来の名古屋という地域文脈に合った新しい運河の利用価値を打ち出すこと、つまり新版「中川運河案内」を構想する力なのではないかと思います。

(以上)